

## 関西支部の紹介

関西支部は、東は滋賀県から西は山口県まで、南は高知県までの近畿（三重県を除く）、中国、四国地方の2府13県に存立する会社、JA、国（独立行政法人）や県の試験研究機関、大学に所属する会員（会員数は340名余り）で構成されています。

毎年、12月上旬に関西支部講演会と関西土壌肥料協議会のシンポジウムを行っています。発表には、各県の試験研究機関を始め、農水の機関や大学が参加しています。シンポジウムは、毎回、特色のある課題で行われており、地域に密着した課題やその時々話題になっている課題が取り上げられています。支部会の開催を中心とした支部の取りまとめを、近畿、中国、四国に立地する大学が2年毎に交代で行っています。

2府13県の農耕地（田、畑、放牧地）面積は平成19年の統計年鑑では全国の約15%をしめ、岡山(900km<sup>2</sup>)、兵庫(852km<sup>2</sup>)、広島(784km<sup>2</sup>)、愛媛(763km<sup>2</sup>)、山口(657 km<sup>2</sup>)の順番に面積は多くなっています。全国の中で占める主要農作物の作付面積の割合は、コメが（コシヒカリ、山田錦など）17%、麦類7%、豆類（丹波黒大豆など）10%、果樹（ミカンなど）30%、野菜（タマネギなど）14%となっています。山林の面積は、全国の約30%をしめ、広島(2,812km<sup>2</sup>)、高知(2,625km<sup>2</sup>)、岡山(2,526km<sup>2</sup>)、島根(2423km<sup>2</sup>)、兵庫(2303 km<sup>2</sup>)の順に多くなっています。それぞれの地域で、品質の優れた特色のある農産物が生産されており、より良くするための試験研究も多くなされています。

中国・兵庫県北部・四国の一部の土壌には、三瓶山や大山、広域テフラ由来の黒ボク土が見られますがその面積は他の地域と比較すると少ないです。その他の地域はほとんどが褐色森林土で、農耕地として使われている土壌は沖積土が多いです。土壌のレッドデータリストとしては兵庫県加西市の疑似グライ化赤黄色土（トラ斑土壌）が非常に緊急に対処しなければ消滅する土壌として存在しています。また、姫路市、栗東市、和歌山市、廿日市市（おおの）に自然観察の森があり、日本土壌肥料学会土壌肥料教育委員会から、モニリスとリーフレット2000部が寄付されました。

関西支部では、近畿・中国・四国の気候風土の元での農業や環境保全に役立つ試験研究を中心とした活動を引き続き行っていきます。



写真左から山田錦栽培地、丹波黒栽培地、栗東自然観察の森土壌断面、トラ斑土壌土壌断面